## 第 12 回大会報告

高橋 真理子

2020年10月31日(土),11月1日(日)の二日間にわたり,Zoomによるオンラインにて,日本音楽即興学会第12回学術大会が開催された。神戸大学での開催予定であったが,新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け,本学会初のオンラインでの開催となった。

大会テーマは「逃走する即興:医学,政治・経済学,そして音楽」で,「WITH コロナ時代」と呼ばれる現代において,大変関心があるテーマであった.

第1日目は、シンポジウム、研究発表2題、JASMIMマッチングプロジェクト交流会がおこなわれた。

シンポジウムは「逃走する即興:医学、政治・経済学、そして音楽」というタイトルで、パネリストは、音楽教育学者の今田匡彦氏と長谷川諒氏、財政学者の金目哲郎氏とアレクサンダーテクニーク指導者で医師の稲田祥宏氏の4名でおこなわれた。新型コロナウイルス感染症が、医療・社会経済・音楽教育にあたえた影響、コロナ渦で音楽や音楽教育に何ができるかなどが語られ、人間と音楽の本質的な関係性について議論された。長谷川氏の「文化創造を志向する音楽活動は『今ここ』でしか起き得ないので、決して不要不急ではない。即興演奏は『WITH コロナ』時代にこそ見直されるべき」という言葉が印象的であった。

堀上みどり氏の研究発表「図形楽譜の演奏に関する一考察」は、図形楽譜の歴史、記譜法、 バイエルが苦手な学生と、堀上氏による図形楽譜の演奏事例が紹介された。初回演奏の音源 は、自由かつ個性的で、それぞれが奏でる世界観に一気に引き込まれた。図形楽譜によって 引き出される多様な音楽性に感動すると共に、バイエルによる音楽教育について考えさせ られる発表であった。

安藤大地氏の研究発表「Fixed Media 作品と管楽器の楽曲のための旋律アウトラインによる即興演奏」は、安藤氏が作曲した作品の、電子音響のパートに合わせ、対話的機械学習でアウトライン曲線を作成し、そのラインの中で、テナーサックスでの無調な即興演奏を探った試行が紹介された。科学的な音楽認知の理論にもとづき、無調な即興演奏の技能を獲得した興味深い発表であった。

「JASMIM マッチングプロジェクト交流会」は、ウェブサイト「JASMIM マッチングプロジェクト」に登録された、参加者の研究・実践内容などの情報をもとに、少人数にわかれ、オンライン交流会がおこなわれた. 私は、ピアノの即興演奏について、実践者・教育者の方々にお話を伺い、有意義な時間を過ごすことができた. 参加者の皆さんが笑顔で話されていたのが印象的であった.

第2日目は、ラウンドテーブル、研究発表5題、パフォーマンス発表がおこなわれた.

ラウンドテーブル「遠隔集団即興演奏の可能性を議論する―どうやってやるの?何がおもしろいの?」は、寺内大輔氏、川田智子氏、倉本高弘氏、富村憲貴氏、野村美貴子氏、丸尾喜久子氏、三宅珠穂氏、高橋真理子の8名でおこなった。遠隔集団即興演奏の面白さや可能性について、発表者らが所属するパフォーマンスグループ「野営地」の実験事例、生演奏などをもとに、フロアと意見交換をおこなった。視聴者と演奏者のフラットな関係性、リアルタイム性、1970年代のテレパシーを用いた演奏など、多岐にわたり議論された。私は発表者であったが、遠隔集団即興演奏ならではの可能性を実感できた。

長谷川諒氏の研究発表「サウンドペインティングが促進する主観的(間主観的)価値判断の 具体とその音楽教育学的意義」は、音楽大学の調査事例から、サウンドペインティグの実践 者が、主体的・協働的に自身の音楽経験を価値づけていくプロセスと、そのような実践の音 楽教育学的意義が述べられた。多様性を尊重できるサウンドペインティングの、大きな可能 性を感じさせられる発表であった。

今田匡彦氏、小枝洋平氏の研究発表「身体、インクルージョン、音楽教育:創造性について」は、特別支援学校と中学校における「身ぶりに合わせた即興演奏」の共同授業が紹介された。授業では、お互いの身体の動きを観察し、新しい演奏を共創する場面や、知的障害児が健常児をリードする場面が見られた。このようにお互いを尊重する心を育む音楽教育がさらに広がることを望みたい。

長山弘氏の研究発表「即興的音楽表現のための WEB アプリケーション『テクミュ(Tec-Mu)』の開発 — 〈ライブ・コーディング〉の特質に焦点をあてて一」は、長山氏が開発した WEB アプリ「テクミュ」の紹介と、体験デモおこなわれた。WEB ブラウザがあれば、どこでも即興的に音楽表現が生成できる「テクミュ」の音楽教育における可能性が広がりを感じる発表であった。

植川縁氏の研究発表「ダヴィデ・モンティ氏とマリア・クリアリー氏によるバロック即興 演奏マスタークラスへの参加報告ーサクソフォン奏者の立場からー」は、バロック即興演奏 の講習会の内容と、フリーインプロヴィゼーションとの違い及び共通点などが報告された。 奏者間での演奏の伝え方や、身体感覚を意識したワークなど、即興演奏を実践するうえで、 大変参考になる発表であった。

寺内大輔氏の研究発表「Mills College における即興演奏を主専攻とする修士プログラムの調査と検討」は、Mills College における即興演奏の修士プログラムを調査し、その特徴を本学会の第11回大会シンポジウム「音楽大学における即興の授業」で展開された議論と照らし合わせ検討した内容であった。即興演奏を教わる、教えるとはどういうことかを考えさせられる大変興味深い発表であった。

バーバラ・アスカ氏のパフォーマンス発表「作曲 AI『CASIO Chordana Composer』による即興演奏」は、人による即興演奏と、作曲 AI を利用したリアルタイムな作曲・演奏の共通点の提示、「CASIO Chordana Composer」「CASIO Chordana TRACK」を用いた即興演奏

と、その機能紹介がおこなわれた、バーバラ氏の演奏する姿、振動する iphone、音楽の全てが一つのパフォーマンスに見え魅了された、演奏後、人間が音楽を作曲・演奏する意味、即興演奏の不確定性やゆらぎについて議論された。

私は今回が初めての大会で、開会前は少し緊張していたが、大会の和やかな雰囲気に居心地よく参加することができた。多角的に即興音楽に触れ、新たな知見を得ることができ、有意義で充実した二日間であった。また様々な制約があるコロナ渦においても、人間と音楽との本質的な関係性は変わらないとあらためて感じることができた。

ご尽力いただいた実行委員会の皆様, 学生スタッフの方々に心から感謝を申し上げます.